遊びの学校
びさい幼稚園

きまりを作る

「シコふんじゃった」という周防正行監督の映画がある。主人公の大学生が自ら属する相撲部に外国人を勧誘する。その外国人は相撲をしてもいいが裸にまわしをするのはいやだという。せめてパンツをはいた上にまわしをするのはどうかと提案する。なぜまわしをするのか、ちょんまげをするのか、と問う。

「ちょんまげだって、スポーツなら頭のカッコウ関係ない。」「それは昔からのしきたりだから。」「あ、しきたり。ＯＫわかります。日本人いつでもそう言う。それはしきたりだから、きまりだから、日本人、ものごとの本質を見きわめて考えることしません。わたしは相撲とってもかまいません。でもひとに自分の裸をさらそうとは思いません。」

外国人の視点を通して日本人の特異性や問題性が浮き彫りにされる。

私どもは幼児教育という土俵で、この日本人的問題構造と格闘している。その一端が、今年度研究発表をとおして取り組んだ「遊びの中できまりと出会う」というテーマだ。

小学校などでは普通の語り口、「先生と三つやくそくをしてください。一つは・・・二つ目は・・・以上のきまりを守って学校生活頑張りましょう」。ここでは「やくそく」と「きまり」の違いが自覚されてない。びさいではそこを意識し続けている。きまりは「守る」べきもの。自分が作成に関与してない既成事実の押しつけ。一方向的。そこで求められるのは、思考停止。やくそくは「交わす」ものつまり、双方向性を本質とするコミュニケーションという営み。びさいの教育目標は「おもいをつたえあう」などの六項目の語尾をみな〝合う〟で統一しており、それは根本でコミュニケーションという営みを目標にしているということなのである。

幼児教育ではコミュニケーションを大事にするから、やくそくの重要性はわかる。しかし、幼児教育において「きまり」に積極的な意味があるだろうか。あるとすれば、きまりを〝つくる〟ということである。

ちょうどこの研究をしているさなかの六月、境港市議会主催で、もと逗子市長の冨野暉一郎氏の講演が開かれた。二〇〇〇年に地方自治法が根本的に変わった。それまでは「地方（において、国という大きな）公共（の仕事をする）団体」だったので、「なぜそうするか」ときかれたら「法律で決まってるから」と答えていれば済んだ。しかしこれからは、「地方自治体」として自分たちのことは自分たちで考えて治めなければいけない。

この話を聞いて、われわれの研究内容が直ちに思い起こされた。

「自治」は言いかえれば「自己決定」である。幼稚園は「主体性」を育む場である。主体性とは自己決定を不可欠な要素として含む。〝させる―させられる〟関係になっていないか注意を払わねばならない。きまりを守らせられるのではなく、自分たちで考えてきまりをつくるということを目指す私どもの幼児教育は、小学校との連携どころか、市民教育まで連なっているのだという確信を得た。

ややもすると人を縛るものである「きまり」や「ルール」との出会いが、遊びの中にあるというのは幸福である。遊びをよりおもしろくするために必要なものとして、出会われる。楽しさの追求によってきまりが求められるからこそ、自ら作りもし、守りもする。おもしろいことに貪欲だった今の年長児は、遊びの中に住まう遊びの神様の降臨を経験していたのかもしれない。

今年もまた一つ、新たなびさいスタンダードが明確になった年であった。そして、この研究はもうじき卒園する年長児たちの協同性からもたらされたものであり、あらためて感謝をもって門出を祝福したい。

「幼稚園教育課程研究協議会」で夏にした研究発表「遊びの中できまりと出会う」を、秋に保護者さんの前でもしました。二日にわたって、たくさんの方が熱心に聞いてくださいました。市の職員の方や市教委の先生、小学校の校長先生も来場くださり、貴重なコメントもしてくださいました

びさいの保護者力、高ッ！

何人もの保護者の方からコメントをいただき、発表者と保護者さんとが思わず涙を浮かべるシーンもあったりして、大変ありがたくうれしいことでした。

幼稚園は、園児と先生と保護者の３つの柱で成り立っています。保護者はお客さんではなく、園を作る人なのです。いつも、そうお伝えしていますが、今年も様々な形で保護者さんが力を発揮してくださった一年でした。

お別れ会で初公開、お母さんたちのフラダンス！ 先生も子どもも踊り出す。

バザーのオープニングをつとめたお母さんたちの和太鼓。 お別れ会でもかっこよかった！

参加型の「大きなかぶ」も画期的で盛り上がりました！